北海道価値創造パートナーシップ会議ｉｎ札幌
～新たな北海道総合開発計画に向けて～

日時：平成27年３月８日（日）９：00～11：15
場所：札幌プリンスホテル　国際館パミール３階
屈斜路・摩周

次　　第

１．開　　会

２．太田国土交通大臣挨拶

３．出席者紹介

４．会議テーマ

５．出席者意見発表

６．意見交換

７．太田国土交通大臣コメント

８．閉　　会

１．開　　会

○司会　ただいまから北海道価値創造パートナーシップ会議ｉｎ札幌～新たな北海道総合開発計画に向けて～を開会いたします。

本日は、皆様、誠にお忙しい中、また、休日、朝早くから、多くの方々に御参集頂きましてまことにありがとうございました。

私は、この会議の進行を担当させて頂きます、国土交通省北海道局参事官の桜田と申します。どうぞよろしくお願い申し上げます。（拍手）

大変恐縮ではございますが、以降、座って進めさせて頂きます。

この会議は、北海道内各地域の課題解決や活性化に日ごろから活躍されておられる方々から御意見をお伺いし、新たな北海道総合開発計画の立案に生かすとともに、地域づくりの関係者相互の協力関係構築の促進も図ることを目的として開催させて頂いたものでございます。

本日の会議は、マスコミの方々含め、一般の方々に傍聴いただいております。

また、本日の資料でございますが、資料１から１３となってございます。過不足がございましたら事務局のほうにお申しつけくださるようお願いいたします。

なお、これらの資料につきましては、後日、国土交通省のホームページに掲載することを想定しております。その旨、御承知おき頂きたく存じます。

２．太田国土交通大臣挨拶

○司会　初めに、国土交通省を代表いたしまして、太田大臣から一言御挨拶を申し上げます。

○太田国土交通大臣　皆様、おはようございます。日曜日の早朝から多くの方にお集まりを頂き、また北海道を代表する、特に知恵ある行動を展開している方々にきょうは御参加をいただいて、楽しみに参りました。

また、こうした政府関係の会議はなかなかこのテーブルぐらいでやることが多いのですが、きょうは遠いところから、たくさんの方にお集まりいただいて、非常に急に緊張しておりますけれども、忌憚のない御意見を頂きたいというふうに思っております。

今回は、北海道価値創造パートナーシップ会議ｉｎ札幌、そして、新たな北海道総合開発計画に向けてということでございます。

国交省としましては、今、昨年の７月４日に「国土のグランドデザイン２０５０～対流促進型国土の形成～」を発表させて頂きました。

地方創生ということが政府で言われておりますが、その地方創生というものは、それぞれのまちが人口減少とか、あるいは高齢化という共通の課題とともに、激甚災害というものがあると、こういう中で、どうやって生き抜いていくか、短期的な対応型の政治や国土のグランドデザインではもうもたないということがありまして、２０５０年、これを目指していこうと。そのときに、それぞれの地域が、個性は一体何かというものを見つけ出し

て、それを育て上げて、そして創生していく。我がまちはこうしていく、これで生き抜くのだと。そして同時に、隣のまちはまた、我がまちはこうやって生きていくのだと、それぞれのところが人口減少や高齢化ということになりますと、「コンパクト・プラス・ネットワーク」というわけですが、しかし、それでは足りないから、この個性ある都市と個性ある都市がチームを組んで、二つ、あるいは三つ、あるいは幾つか大きいところ、真ん中のところ、小さいところ、連携をとるという、ある意味では連携革命ということを大きな主軸にしてのグランドデザインをつくらせて頂きました。東京型のこの都市を全国に押しつけるというのではない。地方創生というのは、それぞれの個性というものを見つけ出して、そしてそこの知恵ある人たちが町長さんや市長さんの横にいて、一緒になってつくっていくという、そういうことを国はバックアップする。そして、個性ある都市と個性ある都市が隣接して生まれたならば、そこには全体的に、例えばスターバックスは３０万人の人口規模がないと成り立たないと言われているけれども、二つ合わせて一つのそうしたものをつくるということができれば、本当により柔軟な、より連携のとれた、より緻密な都市の形成の作戦ができるのだと。

そして、観光ということからいきましても、点から線へ、線から面へと。きのうもいろいろな方とお会いさせて頂きましたが、外国の方が北海道に来られる。そして北海道に来て何を買うかというと、北海道のおみやげだけを買うのではなくて、日本のおみやげを買っていくと。北海道に来るというのは、外国の方からいうと、北海道に来るだけでなくて、日本に来るということになるということから、おみやげ自体も、そこは変わってくるということで、この違いができるという都市と都市との間に、物理学でいいますと、温度が違うからこそ、対流が起きる。その対流というものをむしろ積極的に起こしていきながら、都市間連携を図りながら、そして新しい、２０５０年に向かってスタートしよう。

そのときに、国土形成計画という１０年がかりのものを国交省は常にやっているのですが、これが全国的にはあと２年ほど期間があるのですが、東日本大震災やさまざまな状況の変化ということが急激であるものですから、前倒しして、私たちが今、これをつくり上げて、そして未来に向けて発信する。２０５０年ということの手前に向けて、この１０年をどうするかという計画を出させて頂く。

それが北海道におきましては、北海道総合開発計画ということになります。その北海道総合開発計画、まさにそのときに、北海道価値創造パートナーシップというものをどうつくっていくかということで、きょうはｉｎ札幌ということでやらせて頂く。きょうはその中身について、皆様方にこういう、単なるアイデアだけでなくて、構造的にまちをどういうふうにつくるかという、そこには考え得るチームというものや連携役が大事かというふうに思っているところでございます。新たな北海道総合開発計画は、そういう意味で、これから１０年ということで、１年かけまして、来年の３月ごろまでには策定をしたいと。十分私もこの北海道を回らせていただいて、また、国交省のチームが北海道全体を回らせていただいて、そしてきちっと、未来に向けて北海道はこれで生きていくのだという１０

年計画を出させて頂く。

我が日本におきましては、これからの５年に東京オリンピック・パラリンピック２０２０がある。課題は、２０５０年というと同時に、オリンピック・パラリンピックまでにはということで、走っていって、そこで息切れをしてはならない。そのオリンピックまでの５年、ポストオリンピックの５年というものが、平準化した巡航速度でいくという、この落ちついた流れをつくりたいと思っておりまして、全国のこの計画をつくろうという中に、北海道も同じように、この５年、そして次の、ポスト五輪の５年、そして新幹線が札幌に走るという次の５年、２０２０年と、そして次の２０３０年というところに向けて、十分御理解をいただいて、この期間中に世界水準の価値創造空間の形成を目指して、世界に冠たる、私の言葉で言うと、世界の北海道というところを策定させていただいて、大いにスタートを切りたいと、このように思っております。

結びに、非常に食におきましてもまちづくりにおきましても、本当に北海道は大きなポテンシャルを持っている。絶対ポテンシャルがありますから、そのポテンシャルをしっかりと生かして、新しいスタートを切っていきたいと思っております。

きょうは多くの方に、大変短い時間になってしまうかもしれませんが、お話を聞けることを楽しみにしながら、必ずきょうのいいスタートが切られて、計画としてまとまることを大きく期待をしまして、冒頭の御挨拶とさせて頂きます。お世話になります。ありがとうございます。（拍手）

○司会　ありがとうございました。

報道の関係者の方々を初め傍聴の皆様のカメラの撮影はこれまでとさせて頂きます。

３．出席者紹介

○司会　続きまして、本日御出席の皆様を御紹介申し上げます。時間の関係で、お名前だけ御紹介いたします。

阿部千春様でございます。（拍手）

折谷久美子様でございます。（拍手）

植村真美様でございます。（拍手）

クリーン・スザンネ様でございます。（拍手）

西田孝雄様でございます。（拍手）

佐伯昌彦様でございます。（拍手）

後藤田実様でございます。（拍手）

佐藤太紀様でございます。（拍手）

坂本昌彦様でございます。（拍手）

田中夕貴様でございます。（拍手）

林克彦様でございます。（拍手）

以上、１２名の方々に御意見を頂くこととなってございます。

また、本日は、オブザーバーといたしまして、衆議院議員、佐藤英道先生を初め多くの方々に御出席いただいております。

５．出席者意見発表

○司会　それでは、最初に、御出席の皆様から各地域での日ごろの活動、取り組み、概要などにつきまして、お一人、大変恐縮ではございますが、２分程度でそれらの内容につきまして御紹介頂ければと存じます。

阿部様、折谷様という順で、時計回りで、林様までお願いいたします。

まずは阿部様からお願いいたします。

○阿部氏　函館市縄文文化交流センター館長の阿部でございます。

お手元にお配りしているリーフレットにございますが、この縄文文化交流センターは、函館市の南茅部地区という、人口が５，７００人ほどの小さな漁業のまちにあります。このまちが縄文の宝庫でございまして、平成２３年の１０月に縄文センターがオープンいたしました。ここには北海道唯一の国宝であります中空土偶、これは３，５００年ほど前につくられたものですが、この国宝を展示する登録博物館でありながら、地域の情報発信の拠点となっている“縄文ロマン南かやべ”という「道の駅」が融合した施設でございます。いわば文部科学省と国土交通省が融合したような施設であります。

きょうはこの「融合」とか「連携」というのがキーワードになるかと思います。私は教育委員会の所属でございますけれども、観光には大きな可能性を感じておりまして、観光は教育の現場であり、国際社会の中において、日本の価値を広める場でもあると考えております。そして、北海道の魅力は何と言っても自然と、その自然に育まれた縄文文化、そしてその縄文の精神を引き継いだアイヌ文化であろうと思っております。

今、この縄文文化の価値を世界に発信しようと取り組んでおりまして、北海道と北東北３県で世界遺産登録に向けて推進をしているところです。しかし、北海道の縄文遺跡については、道南の６遺跡だけが構成資産になっておりまして、北海道全体に広がっているわけではございません。そこで、北海道全体が輝いていくためにはどうしたらいいのか、縄文の価値や魅力は何で、それをどうやって道北、道東に広げていくかということについて、後段、お話をしていきたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

○司会　ありがとうございました。

続きまして、折谷様、お願いいたします。

○折谷氏　函館からまいりました、ＮＰＯ法人スプリングボードユニティ２１の折谷久美子と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

スプリングボードユニティ２１、聞き慣れない名前だと思いますので、まず初めに名前の由来について御紹介させて頂きます。

スプリングボードとは跳び箱の跳躍板です。飛躍や発展するきっかけとなるものです。ユニティとは統一、まとまり、合同を意味します。１９９９年に立ち上げましたので、２

１世紀へ向けてみんなで力を合わせ、心を一つにして、楽しみながら目標に向かって活動していこうと名づけました。当時、函館でまちづくり活動といえば男性がほとんどでしたので、女性や市民が気軽にまちづくりに参加できることを目的に設立いたしました。

設立の動機は、函館の夏の最大イベントであります函館港まつりにいか踊りというのがありますが、いか踊りに出たい、ただこの思いだけで設立いたしました。毎年８月３日、いか踊りに参加するたび、年々世代を超えて大勢の仲間がふえてきました。お祭りを盛り上げることで地域の人に喜ばれることを実感いたしましたが、いか踊りは年に１回しかないのです。大勢の仲間ともっと別な活動もできるのではないかと思いまして、２００４年に法人格を取得いたしました。現在では、道路沿線にお花を植える活動など、地域の人と一緒に連携しながら、おもてなしの気持ちで取り組んでおります。

後ほど活動については連携事例を紹介させて頂きます。よろしくお願いいたします。

○司会　ありがとうございました。

続きまして、植村様、お願いいたします。

○植村氏　おはようございます。私は公益社団法人日本青年会議所北海道地区協議会、本年度、会長をさせていただいてございます。赤平青年会議所より出向させていただいています、植村真美と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

私たち青年会議所は、全国で６９７組織ある中で、北海道は４８団体、組織として存在させてございます。全国で３万２，０００人いる中で、本年、北海道は１，４００人で活動させていただいてございまして、まちづくりであったり人づくり、地域をリードする人材を育成しようということで、日々、仲間で喧々囂々とやらせていただいてございますが、ことしのテーマは、やはりこれまで北海道地区協議会、６４年間歴史がある中で、いろいろさまざま地域でいろいろな宝をつくり上げてはきていますけれども、やはり今、人口減少とともに、メンバーもルーム数も減っている中で、もう少し地域間、他団体とも交流しながら、つなぎ合わせていきながら、またさらなる価値を創造していくといったことが必要なのではないかなということで、人と人とのつながりを大切にということと、また、宝島、北海道の創造ということで活動を展開させていただいています。よろしくお願いいたします。

○司会　ありがとうございました。

続きまして、クリーン様、お願いいたします。

○クリーン氏　皆さん、おはようございます。北海道大学のクリーン・スザンヌと申します。もともとヨーロッパのオーストリア出身ですけれども、研究と仕事と留学を含めて、もう１０年以上、日本に滞在してきました。東京と京都の生活が長かったのですけれども、去年、北海道大学の着任をきっかけに、北海道に移住してきました。北海道は今までそんなに関係なかったのですけれども、ここに着任してきてから、すごくいろいろな意味でものすごくポテンシャルを感じるきっかけが多いのですけれども、それと同時に、これからますますそのポテンシャルをいろいろな意味で生かせる感じと思いまして、今、私は

実際、北海道大学で活動している新しいプログラムなのですけれども、ちょっと資料を回しますが、現代日本学プログラム課程という、北海道大学で新しいプログラムなのですけれども、全部英語で行っているプログラムです。そういう意味では、やっぱり北海道の将来像とすごく密接につながっていると思うのですけれども、やはりいろいろなさまざまな方に北海道に来ていただいて、うちのプログラムは４年のプログラムで、最初の２年は主に英語でやっているのですけれども、その後に、せっかく皆さん来ている留学生に、集中的に最初の２年間、日本語を勉強することになっているので、そういう意味では、やはり国際化、北海道でしかできないようなことと、やっぱり国際性を同時に生かすというプログラムです。そういう意味では、我々の活動は、やはりこれからの北海道にいろいろな意味でつながっていると思いますので、よろしくお願いします。ありがとうございます。

○司会　ありがとうございました。

続きまして、佐伯様、お願いいたします。

○佐伯氏　少し押し気味のようなので、私は短めにお話しします。佐伯と申します。洞爺湖町からまいりまして、洞爺湖町では一農業経営者として農園を営んでおります。施設園芸を主体にした園芸野菜と、サクランボとイチゴの観光農園で、最近の実感としては、さすがにやっぱり海外の方が観光農園にも訪れるようになったなというのを実感しております。

もう一つ、地元の食材を生かした農産加工品の会社を、これは行政が主導でつくって、行政が運営していたのですけれども、高コスト体質で、やりきれないというので、そんな器を建ててもったいないからということで、私どものほうで民間の出資をつくりまして、新たに再生して、一切補助なしで運営して、地元の野菜や穀物、米が中心ですが、それをほかから入れることなしに、こだわりながら、細々と加工会社もやっております。

もう一方で、ネットワーク型の生産者集団組織をつくりまして、今１，５００名ぐらいで、北海道から沖縄までの生産者の出資によって成り立った会社をつくって、特にマーケティングを中心にして、日本の農産物をどう国内需要を喚起したり、それから、海外も含めて輸出の可能性がある、あるいは、今騒がれている６次産業化というのはどこまで可能なのかということも含めて、そういった、本来、某団体等がやらなければいけないことを、ある意味では率先してやってきたというところがありまして、特に後半のほうの部分では、食と農を舞台にした地域再生というか、地方創生の可能性がある場合に、どういったことが必要かということをお話しさせて頂ければと思います。

以上です。

○司会　ありがとうございました。

続きまして、西田様、お願いいたします。

○西田氏　北海道酒造組合専務理事の西田と申します。よろしくどうぞお願いいたします。

私のほう、簡単に現在やっていることを御紹介いたしますが、資料の７の裏のページに

農山漁村６次産業化推進をとらえた北海道酒造組合の活性化事業というタイトルのフローシートが載っておりますので、これを見て頂きたいと思います。本日のこのテーマは北海道価値創造パートナーシップ会議ということでございますので、私ども北海道酒造組合、低迷する日本酒業界の中で、北海道は今のところ非常に右肩上がりで、非常にうまくいってきていると。ここ８年ぐらいで非常にうまくいってきている。出荷数量も伸びている、輸出も伸びている、そんな状況でございまして、こうなった一つというか全体の要因なのですけれども、いろいろな団体とのコラボレーション、お酒の業界単独で頑張ったってたかが知れている。いろいろなところとくみすることによって、こういう成功を見てきているということでございます。そういった意味では、このパートナーシップ会議というのはまさにぴったりだなと、そういうぐあいに思っております。

この基幹となるものは、やはり清酒の原料は米でございますので、道産米を使った道産酒をつくっていくということで、今から１５年前は、清酒原料に占める道産米の割合というのはわずか１８％でございましたけれども、直近ではこれが５８％に上がっております。もともと北海道は米チェンが成功しまして、米どころは酒どころということで、今度は米チェンから酒チェンにということで、ホクレンとか北海道農政部、そういったところといろいろくみしながらこれを進めているところでございます。

そういうことで、いろいろな団体とコラボをしておりますので、後ほどまた詳しいこと、そして課題をまた述べたいと思っております。

以上でございます。よろしくお願いいたします。

○司会　ありがとうございました。

続きまして、堀様、お願いいたします。

○堀氏　砂川というところからまいりました。きょう、大臣にお礼を申し上げたいのは、砂川に、ことし、スマートインターというのがオープンしまして、年内にオープン、開通するようにしていただいて、本当に地元がまた盛り上がってくるのではないかと思って感謝しているところでございます。

私は薬の学校を出まして、武田薬品というところに入りまして、どうしても商売がしたくて北海道に帰ってきました。砂川生まれで砂川育ちです。

そんな中で、今考えていることは三つあります。北海道の素材を利用してどういうお菓子ができるだろう、そして、体によくておいしいお菓子ができないだろうかということが一つと、北海道は、私のところもしているのですけれども、６次産業、畑、去年はお米もつくりました。原料をつくって、原料を大事にしてお菓子をつくろうということで、今、６次産業にも取り組んでおります。３番目は、つくづく今思うのは、私もきょう、折しも誕生日で、６２になるのですけれども、いわゆる年齢ではなくて、やる気ではないかと思っております。うちは７０歳定年なのですけれども、最高齢７７歳の方がいらっしゃって、農業をいろいろ手伝ってもらっていますけれども、とにかくこれから高齢化になります。その中で北海道がどうやって高齢者の方が元気よく働いていけるか、そういう場所が

できるかというふうに考えております。今後ともひとつよろしくお願いします。失礼します。

○司会　ありがとうございました。

続きまして、後藤田様、お願いいたします。

○後藤田氏　御紹介頂きました、士別市上士別町の後藤田と申します。

私は父親が代表を務める農業生産法人、株式会社ファーム６・６に勤務する農業後継者であります。

本日は、私どもが実践しているＩＴ農業について紹介したいと思います。

既にお手元に１枚のパンフレットをお配りしてありますので、見ながらお聞きください。株式会社ファーム６・６について、少し紹介いたします。うちの会社は旭川市から約５０キロ進んだ士別市内の上士別町において農業生産法人として経営を行っております。平成２２年度から始まった国営農地再生整備事業上士別地区の事業化に向けた調査が法人化に向けた契機となりましたが、それ以前から、地域では高齢化や後継者不足が地域農業を守る上で問題となっておりました。特に上士別町内でも、私たちが農地を所有する兼内地区においては、農業者の高齢化が進み、後継者不足などがあり、離農していくよう土地を継承、維持していくほかはありません。その中で、大区画化ほ場へと整備する国営事業の進展により、１個団体が大幅な面積を持ち、農業経営を務めることが可能となりました。今現在では、私と父、私の妻、私の母親、季節雇用とか、田植え時期には１５名の雇用をしており、今は田んぼが１０６．９、畑が５．４、合わせて１１２．３ヘクタールの経営と規模拡大し、行っております。

その中で、ＩＴ農業研究会を立ち上げ、無人化に備えて労働力や個人にかかるコストなどを求める会を立ち上げて、北海道大学の野口教授と出会って、無人化に向けた研究をしております。

○司会　ありがとうございます。

続きまして、佐藤様、お願いします。

○佐藤氏　ありがとうございます。コミュニティ放送局ということで、今、全道のコミュニティ放送協議会の会長も務めておるものですから、その説明と、我が局の説明をちょっとさせて頂きたいなと思います。

コミュニティ放送局というのは、全国に今、３００局近くありまして、１行政区に１放送局という括りで認められた放送免許でございます。地域に特化した情報、天気、道路、北海道では除雪情報、もしくは、特に留萌の場合はおくやみ情報なども放送しておりまして、非常に地域に密着した情報を展開しておりまして、また、東日本大震災以来、コミュニティ放送局の有用性というのは強く認められるところでして、被災・避難生活長くなればなるほど、給水や配給、避難所、または風呂に入れるのかとか、ごみはどこで捨てられるのだとか、避難所情報のほかにいろいろと生活に特化した情報を流していったという東北の仲間の状況を聞いております。

留萌の場合は、特にエフエムもえるの場合は、何でこんなことを始めたのかというと、地域主体の、地域の市民参画ではなくて、市民主体のまちづくりがしたいということで、もともとやはり１０年前に設立する時点では、どうしても地域のことは他人事であるということがきっかけでした。悪いのは誰かのせい、それは大概自治体だったり行政のせいなのですけれども、それはなぜそんなことが起きるのだろうかというと、自分の地域のことを他人事としてとらえているからだろうというふうに考えました。地域のことを知らない、それがスタートで、地域のことを知るためにどうすればいいのか。それは自分たちの地域のことを調べて、自分たちで展開していく。このためにはコミュニティ放送局というツールは非常に有効であったということが１０年前に気づいた点で、ボランティア、当時１０名から始めたのですけれども、現在、登録１，０００名を超えまして、３万人の聴衆エリアの中で非常に高い比率ですが、その中から約１００人、多いときは１２０人ぐらいの方の、１週間、放送ボランティアの方で動いております。会社は何をしているのかというと、それは維持するために経費を生まなければなりませんので、そういう地域のプラットホームをつくるということで、地域のことを自分事化できる市民を１人でもふやそう、その中間システムを行政と市民、または農業と漁業、産業と産業を結ぶ地域主体のまちづくりのプラットホームということでつくっております。後ほどまた御説明いたします。ありがとうございます。

○司会　ありがとうございました。

続きまして、坂本様。

○坂本氏　坂本でございます。

私は株式会社アークスという、北海道ではスーパーマーケットを経営している会社の観光部門を担当しております。ホテルと旅行代理店もやっておりますが、地域の仕事は、北海道ネイチャーセンターという、私が社内ベンチャーでつくった会社が２６年目になりますけれども、この会社でやっておりますので、簡単に説明させて頂きます。資料に詳しく説明は書いてありますので、ごらんください。

１９９０年に日本で初めてのアウトドアの会社として設立しました。当時は３人のガイドで始めたのが、今現在、沖縄まで入れますと約５万人のアウトドアガイドがいますので、一つの業種としては、この２５年間でかなり大きくなったと思います。

ネイチャーセンター設立の場合は、いろいろなことが反対されました。やっていけるのかとか、自然を利用して商売してどうなのだということも言われましたけれども、やはり一番必要なのは、地域の方々の協力、連携が必要だということをそのとき学ばせて頂きました。

初めて体験型の修学旅行を企画して、今、全国的にもそうなっていますけれども、それである程度黒字化になりました。

あと、成功するとまねされるということで、道内外でいろいろな地域ガイドがふえまして、ライバルでもありますけれども、切磋琢磨してこの業界を盛り上げております。

業務の多角化ということで、大学の教育関係と連携したり、関係官庁の業務委託を受けたり、大手旅行代理店の観光のプランニングをしたりしておりますけれども、今、道内外で各地域の自治体アドバイザーをしております。当初は観光のアドバイザーでございましたけれども、入っていくうちに、産業とか福祉、医療とか教育のことも一緒にやってくれないかと言われておりますので、きょうは、後ほど６分間の中では、日ごろ、地域の方々といろいろな事業をやっている中での悩んでいること、また、ちょっと意見として言いたいことを述べさせて頂きたいと思っております。よろしくお願いいたします。

○司会　ありがとうございました。

続きまして、田中様。

○田中氏　紋別からまいりました田中夕貴と申します。紋別市はオホーツク海のほぼ中央に位置していまして、このピンクのパンフレットの裏の地図をご覧下さい。オホーツクの真ん中にあります。冬の間海は流氷で閉ざされておりまして、漁師さんは今お休みしておりますが、そのかわり流氷砕氷船ガリンコ号が国内外のお客様に大変人気で、毎日たくさんの観光客をお迎えしております。流氷が沖へ去る今月下旬には、海明けの毛ガニや春のニシン漁が始まり、とても豊かな港まちです。また、オホーツクのミネラル豊富な牧草で育った牛のミルクやこだわりのチーズなど、酪農も盛んです。そして林業では、森林林床面積日本一の地域であり、発電量５万キロワットの木質バイオマス発電所も建設中という、環境保護やエネルギー問題にも貢献できる地域です。

そんな自然環境に恵まれた地域で暮らす私たちにとって一番不安なことは、近年、急速に進む医療格差の問題です。私たちは出産のためや救急医療を受けるため、また、通院のために長距離の移動をしなければならなくなりました。平成元年に鉄路を失った私たちの地域では、暮らしのほとんどが道路に依存しております。私自身、６０キロ離れたまちに通院をしまして、出産をした経験から、道路は経済や物流だけではなくて、命を守り、暮らしを支えるために最も重要なインフラであることを実感致しました。また、地域の空港であるオホーツク紋別空港というのがあるのですが、私たちの生命線でもあることから、空の道、陸の道、海の道と、地域の未来を考える住民団体、オホーツクの道と未来を考える会を２００７年に設立いたしました。その後、地域の女性からも賛同を得て、女性の視点から道づくりを考える懇談会、ローズヒップスという女性団体もできました。

このように、年々地域での理解や関心が高まり、現在は行政と地域住民で取り組む紋別官民協働型道路インフラマネジメントという組織も立ち上がりました。そこでは、一昨年の暴風雪により９名の尊い命が失われるという痛ましい事故を教訓に、翌年からは暴風雪に備えた準備や緊急時の対処の方法を住民同士で広めることや、民間の敷地を吹雪時の待避所として活用させてもらう実証実験を行っています。その吹雪待避所のチラシが緑のものになるのですが、他にもいろいろと地域の安全のために活動を行っています。民間だけではなくて、行政とともに知恵を絞り、協力しながら、少しでも地域の問題を解決できるように努力しております。

地域では以上のような活動を行っています。

○司会　ありがとうございました。

最後になりましたが、林様、お願いいたします。

○林氏　皆さん、おはようございます。十勝からまいりました、北海道ガーデン街道協議会の会長をしております林と申します。

私の取り組みですが、北海道ガーデン街道協議会は２００９年に設立して、２０１０年から活動を開始しております。２５０キロという長い道路のガーデンをまとめて、このガーデン街道をつくりました。そこで培ったことですが、地方の元気には連携によるイノベーションがとても重要だと考え、活動しております。

私は大学、そして留学から戻り、新聞、メディア、そしてホテル、飲食店、観光とメディアでいろいろ働いてきました。若くしていろいろなことを任されて、プロジェクトマネジメントができずに、本当にたくさん失敗しました。それを通じて、反省をして、改めて社会人で小樽商科大学の松下村塾のようなところでマクロ経済学、そしてイノベーション、起業化精神、そしてマネジメントを学んできました。やはり社会人になってから改めて学び、そして実践していくことが重要であると、私はそういった方々を応援する人となりたいと感じております。

詳しくは、この後、６分間で説明させて頂きたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

○司会　ありがとうございました。

引き続きまして、今度は御出席者の皆様から、各地域での活動、取り組みを踏まえて、日ごろの御活動で感じた課題、あるいはその解決方策、それを踏まえまして、新たな北海道総合開発計画や行政などに期待することにつきまして、これも大変恐縮ではございますが、お一人６分間を目途に御紹介頂ければと存じます。

今回は先ほどと逆回りで、林様、田中様という順に一巡をお願い申し上げます。

まず林様からお願いいたします。

○林氏　ありがとうございます。私、この資料、右下に林克彦と書いてありますが、恐らく一番下のほうに、一番最後のページに入っていると思います。

本日お伝えさせて頂きたいことは、６分の中で全部は話せませんので、一つ目、ガーデン街道とは、北海道初の広域観光周遊ルートであると私は思っております。２番目、地方創生・観光イノベーション、新結合。そして３番目、地方活性化に必要な人と情報と意識。４番、５番はちょっと長いので、御参照頂ければと思います。

１点目ですが、北海道ガーデン街道は、先ほど申し上げたように、もともとあった七つのガーデンを２００９年にまとめて、そして北海道ガーデン街道という名前にいたしました。もともとは国道３８号線、２３６号線という国道だったのですが、それを顧客視点、観光客目線でガーデン街道という名前にしたところ、右下にありますが、連携する前は延べ人数３５万人、ほとんどが地元の方中心でしたが、ガーデン街道という名前、そして連

携チケットをつくったことで、５５万人までふえました。それまではほとんど地元、北海道の方々だったのですが、今では７割ぐらいが道外の方々が来るような施設になりました。これは私が、協議会で運営し始めましたが、今はベンチャー、株式会社でしっかりと利益も出せる企業になろうということで、今のところ順調に黒字を４年間続けております。なりわいが重要だということです。

もう一つ、やはり連携が重要だということで、その下にひがし北海道３つ星街道とありますが、これは東北海道観光事業開発協議会が主催をしております。ガーデン街道がいい事例であるということで、この主催の方々が、知床、摩周湖、阿寒湖、非常にすばらしい資源があるのに連携していないということで、この街道をつくりました。我々はガーデン街道、そして３つ星街道、さらに大きく連携して、やはり道東は広いですので、ガーデン街道、道北から十勝の道東、そして釧路のほう、知床のほう、そして網走、そこからまた旭川に戻れるような大きな周遊ルートをつくって、インバウンドのお客様が本当に喜べるような施設、札幌、小樽、そして函館だけではないよと、どんどんどんどん来て頂けるようなことをやっていきたいと思っております。

そして、私はやはり観光イノベーション、新結合が重要だと思っております。というのは、先ほども申し上げたように、道東、道北のように、札幌のような大都市圏、そしてインバウンド客が利用するハブ空港、新千歳空港から離れたエリアは、やはり連携して発信していかなければいけない、そしてそこにヒントが隠されていると思います。

５ページ目にありますが、キーポイントは行政区域を超えた２５０キロの広域連携であります。そして、点から線、面、新しい概念の創造、そして大きな市場が反応する、動くことが重要です。

ただし、やはり２０１０年に十勝から札幌まで高規格道路が完成いたしました。当然、新千歳空港は真ん中にありますが、やはりこれは非常に大きなことでして、やはり交通の便がよくなり、メリットがありました。道東道はまだまだ未整備のところがありますので、やはり一日も早い完成を望んでおります。

そして６ページ目、私はいろいろな依頼があり、いろいろ相談にものっておりますが、課題は共通していると思います。地方の地域資源はある、人はいる。ただし、イノベーションのために必要なものはない。それが何かということは、次の７ページにありますが、中央とローカル、ローカルとローカルを結ぶ人脈、そして情報が足りていないのではないかと。そして、国内外の豊富な経験を持つクリエイティブで危機意識のある人、そして連携をマネジメントできる人、これが必要であると思っております。

そして、ただ足りていないというだけでは解決になりません。私は、ちょっと飛ばして、９ページにありますが、この北海道ガーデン街道や３つ星街道の事例に沿って、全国各地のイノベーション推進を具体的に実践的にお手伝いができないかなと思っております。それをイノベーション推進のためのシステム構築、そしてパッケージ化をすることで、わかりやすく全国の自治体にいくのではないかなと思っております。

実際にその事例というか、私の考えていることが１０ページ目にあります。ローカルには、左側の赤い丸です。市町村があり、そして優秀な人材もいます。ただ、地方に行けば行くほど、市町村に優秀な人材は就職してしまいます。市町村の方々は、やはり予算などは自分の自治体、市町村内で使いたいという思いが強くて、なかなか連携ができないという場所が多いです。ローカルには産学官があり、メディアもあり、農業、酪農、１次産業があり、観光もあります。ただし、なかなかクリエイティブなことができない。そして私は、東京とか、中央にいるクリエイティブな人材、ＩＴ経営者、クラウドプランニング、メディア、映像、そしてインバウンドの会社だったり、そういうところと融合することでイノベーションができるのではないかなと考えております。

私は必ずこれを実践として、なりわいとするようなことで、どんどん地域を応援する、支援する仕組みづくりをしていきたいと思います。

最後に申し上げますが、市町村に相談しても、都道府県庁に相談しても、やはりイノベーションのことを話しても、どこへ行っていいかわからないというのが非常に大きな問題だと思うのです。町村へ行っても、今回の地方創生の商品券のことはわかるのだけれども、イノベーション推進というのは地方創生の中に書いてあるのです。地方イノベーション推進。ただし、そこの窓口が、誰も情報を持っていないというのが私は非常に大きな問題だと思っておりますので、ぜひ、これに関しては観光のイノベーションが中心ですので、やはり観光関連の方々がしっかりとイノベーションを推進する、応援するという仕組みをぜひつくって頂ければ幸いでございます。

以上、ありがとうございました。

○司会　ありがとうございます。

続きまして、田中様、お願いいたします。

○田中氏　先ほどお話ししました地域での活動のほか、私は北海道の地域と道をつなぐネットワーク連携会議という団体の代表を務めさせていただいております。この団体は、北海道の高速交通インフラの整備促進を目的とした全道各地の１２の住民団体が連携し、中央要望活動や啓発活動を行っております団体です。

今日、お手元にお配りいたしました漫画の資料は、私たちの会でつくった、こちらのブックレットから抜粋したものです。このブックレットでは、私たちの暮らす地域の現状を知って頂き、御理解を頂きたいことと、ぜひ北海道内の皆様にも、いま一度日本の明るい未来のために北海道が果たせる役割と価値を知って頂きたいとの思いで、わかりやすく漫画にいたしました。

１ページ目の北海道の大きさについては、案外道外の方には認識されていないので、わかりやすく比べてみました。

ページをめくって頂くと、北海道には日本一がいっぱいということで、特に食料においては、日本人の安全・安心な暮らしのもととなる食料をたくさん生産していることを子供たちに教えております。生産量が多いのはもちろんですが、そのほかにも、その土地の風

土を生かしたこだわりのある素材や加工品の数々は北海道の大きな魅力です。

また、次のページは、私の業界である観光についてなのですが、昨年度の北海道内観光入込客数は過去最高の５，３１０万人となり、観光業は北海道の経済発展、地域の活性化に大きく寄与しているものと言えます。

私の住んでいる紋別市でも、オホーツク紋別空港が、１日１便ですが、羽田空港路線が通年で運航されていることや、千歳空港を初め各地空港からも、旭川紋別自動車道が延びたことや、道東道が開通し、２次交通がスムーズになったことで、お客様の周遊エリアが拡大されたと感じています。

私たちのエリアでも、今後、海外から羽田空港で乗りかえ、紋別便を利用し、ダイレクトにオホーツクエリアにお越し頂くツアーを誘致しようと、昨年は市長を団長にして、周辺市町村の皆さんと一緒にタイへ誘致プロモーションに行ってまいりました。その後、タイのメディアが取材に来てくださるなど、とても関心を持っていただいています。

特にアジアのお客様には、雪と流氷に強い関心を持たれますが、同時に、冬期間の移動に不安を感じられることが多いです。現実的に、今シーズン、道東エリアは何度も暴風雪に見舞われ、各地で通行止となり、地域が孤立化し、地域住民と共に観光客も閉じ込められる状態がありました。今後、道路の整備が進めば、悪天候の地域を回避して別のルートで安全に目的地に向かうなどの選択肢ができれば、北海道が今よりもさらに安全な観光地として安心感も高まると思います。

また、グリーンシーズンでは、国内はもとより、アジアからのお客様にもレンタカーを利用したドライブ観光が好評です。インバウンド観光に高速交通ネットワークの果たす役割はとても大きくなっております。

昨年度は訪日外国人の数が初めて１，０００万人を突破し、そのうち１割以上の１１５万人の方が北海道に訪れていらっしゃいます。国では２０２０年までに２，０００万人を目標に掲げていらっしゃいますが、アジアからの訪日外国人にとって、北海道の豊かな自然やおいしくて安全な食べ物は大きな魅力です。今後、今以上にたくさんのお客様を北海道として受け入れていくためには、今現在、受け入れの多い札幌市を初めとした主要観光地に加え、地方のまちがさらに素材を磨き上げ、その魅力を広く発信していくことと、訪れる観光客が周遊しやすいネットワークが重要なカギになると思います。

そして、私自身、お客様と接していて、大切に思うことは、北海道観光に必要なのは、地域での温かいおもてなしの心だと思います。私たち観光業はもちろんなのですが、地域の方々の温かい笑顔はお客様にとても好印象を与えます。私たちのまちは、お越し頂くお客様をまち全体で温かくおもてなしができるまちづくりを目指しています。

でも、暮らしている人たちが地域に不安を感じていれば、笑顔でのおもてなしはできません。地方においての不安、子供を産みたくても産めない、家族の中に病人がいれば、１日がかりで長距離通院をしなければならない。医療、福祉、教育、人の交流など、暮らしの条件が厳しい地方のまちにこそ、交通インフラが果たせる可能性や役割は大きいと思い

ます。暮らしを支え合う地域と地域の連携、人と人との交流、交流が拡大されれば、必ず各地の魅力をさらに高める商品や地域づくりの意識も高まります。そして、何より地方を元気にしてくれます。今後も地方が輝けるためのネットワーク構築に強い期待をしております。

以上です。

○司会　ありがとうございました。

坂本様、お願いいたします。

○坂本氏　それでは、私、パワーポイントで資料をつくっておりますが、１０ページから、３ページほど、日ごろの活動を踏まえた意見ということでまとめさせて頂きました。

先ほど私、申し上げましたが、北海道ネイチャーセンターという会社で、全道各地の自治体のアドバイザーを経験してきております。観光、地域振興が多いのですけれども、個人及び会社で、道内の９０以上の自治体の仕事を行ってきました。今現在もやっているところもありますし、何回かしかやっていないところもあります。二、三回アドバイザーをやったという自治体もありますし、もう既に２０年以上ずっと継続してやっている自治体もございます。

仕事を依頼される際の要望では、私のところに来るときは、ほとんど総論はわかっていると。また、自分たちでもある程度プランはできていると。ただ、具現化する方法がわからないのだというところが多いのが現状でございます。

また、私どもに来るときには、学識経験者とかシンクタンクとかプランナー事務所さんにコンサルを受けたけれども、結局、総論中心の企画書が提出されて、よく理解できなかったのでということで、私どもに具体的な話を聞きたいというケースが非常に多いです。

下によく頼まれるテーマ、あくまでも例でございますけれども、地域では第１次産業、農業、漁業を利用した観光振興策、北海道の場合は自然がたくさんあります、国立公園もたくさんありますので、自然を利用したエコツアーの開発、あと、６次化産業をしたいということで、農業、漁協の方、都市交流を図りたい、なかなか観光業者がいないので、ボランティアガイド組織をつくって体験メニューの開発とかガイド提供したいという方もいらっしゃいますけれども、現実は、１年、２年で簡単に組織も体制もできるものではございません。

次のページなのですけれども、皆さん方おわかりになっている方がたくさんいらっしゃるかもしれませんけれども、一般的に私どもアドバイザーの人間が入ってやることは、この順番でやります。

一番大変なのは地域内調整です。観光で振興したいといっても、いろいろな御意見がありますから、その御意見を、ベクトルを一つの方向にまとめるということが大変です。やはり地域に、特に都市でない地域に行きますと、農業の盛んなところは農業関係者、農協の組合長さんとかトップの方々としっかり話をしなければいけない。漁業などでは漁協さ

ん。例を挙げると、羅臼町なども、最初、私が入って三、四年、全然進まなかったのですけれども、羅臼漁協の組合長さんが、よし、観光をやるぞと。参事２人いるけれども、１人は観光担当にするぞということで決めていただいてから、非常にスピードがついて、今、観光開発を進めることができるようになりました。ただ、それも３年、４年、同じ話をしたり、何十回も羅臼に通って、また、地域の方のいろいろな御協力をいただいてできたことでございます。

２番目の、地域リーダーの育成とか、ビジネス化するための課題整理とか、具体的な対処、マーケットのマッチング、やっぱりアドバイザーの人間は実際に旅行商品をつくるところを紹介して、それも継続してお客さんを送客しなければいけないという使命を負いますから、それも大事です。

あと、最後に書いているように、一時的には成功しても、３年、４年後にはうまくやっていけないということも多いので、継続的なフォローをしっかりするということが必要かと思います。

求められることというのは、調整力とか、法律とか、知識全般、企画力、ここに書いているようなことです。

最後のページなのですけれども、北海道だけではございませんけれども、総論を考える方はたくさん国内にいらっしゃいますけれども、各論を具体的に地域に入って同じ目線で動かしていけるという人がいないです。私も大学、非常勤ですけれども、もう３０年近く、幾つかの大学で教えさせていただいていますけれども、なかなか観光学というのは、日本の場合は座学中心でございますので、教鞭をとっている方々が観光学を非常に専攻してきたり、現場を知っている方というのは非常に少ないのが現実です。中には、もちろん知っている方もたくさんいらっしゃいます。

また、観光専門のプランナーさん、例えば大手広告代理店さんとかシンクタンクさんにも、１９９０年前半のバブル期ぐらいまでには、必ず複数名の方がいらっしゃったのですけれども、その後、なかなか観光の仕事も少ないということで、今は大手さんの中でもそういう観光のプランナーを専門に雇っているところというのは非常に少なくなっています。ですから北海道内でも、いろいろなところでプロポーザル的な何か国の仕事とか自治体の仕事がおりても、結局、孫請、ひ孫請で、結局同じような人が何人かでやっているというような状況に今は陥っております。

そういう中で、やはり具現策をしっかり実行できた地域だけが成功していると思います。成功したところを見てみると、やはり棚ぼた的にぱっと企画があって、すぐ成功したということはありません。地道な努力とかがあって、また、しっかりやるべきことをやったところだけが成功していると思います。

また、産学官の連携なども、こちらの今回の指標の中にも書いておりましたけれども、では産学官で、お互いの業務、役割を実際に理解していらっしゃるかと。私は自分からやったわけではございませんけれども、大学でも３０年間、いろいろな大学で教えさせて

頂いたり、自分でも三つの観光の事業をやっていて、官庁さんの仕事も二十七、八ぐらいから御一緒させていただいておりますので、ある程度わかるのですけれども、なかなかそういうことをわかる人間というのを育てていかないと、うまくいかないのではないかなと思います。

あと、国際観光、国際事業のことも指標に書かれておりましたけれども、やはり語学とか当該国の商習慣、また、その国の法律、また、その国での太いパイプがある方というのは非常に少ないのが現状でございますので、そういう方も人材育成をしていきたいと。

まとめは、地方創生を行うためには、やはり地方のリーダーを教育できる、そういう人材を早急に育成する事業を何とか進めていって頂きたいなというふうに思っております。

以上でございます。

○司会　ありがとうございました。

続きまして、佐藤様、お願いいたします。

○佐藤氏　先ほど地域の人が主体的に地域づくりをするというお話をしましたけれども、そういう主体意識を持った方がエフエムもえるにたくさん集まってこられまして、おのずと主体的な人が持ってくる課題という集積と、それの明確化も出てきています。

そこで気づいた点を幾つかお話しますが、例えば、留萌というのは知名度がほとんどありません。全国的にも、全道、札幌在住の方にも、留萌ってどこだっけという、おぼろげな位置しかなくて、例えばどのぐらい知られていないかというと、北海道限定ラベルの清涼飲料水があって、北海道生乳使用ということで、必ず北海道の地図が載っかっているのですが、大概、留萌管内の天売、焼尻という島が載っていません。利尻、礼文という島は載っていて、全部で人の住んでいる島は北方四島を除くと５島あるのですが、利尻、礼文、天売、焼尻、奥尻と、三つは載っているのですけれども、我々の島、天売、焼尻だけが載っていない。留萌観光連盟事務局として要請をしたところ、札幌に本社のあるビールの清涼飲料水には３カ月で反映、竹鶴さんがもともとおられた会社の清涼飲料水はごく最近やって頂きまして、残る会社は、赤いラベルの有名な、アトランタに本社のある会社なのですが、そちらにきちんと現在、異議申し立てをしておりまして、そのぐらい、地域のアイデンティティが確立されていないという地域でございました。今でもなかなか認められないところがあるのですが、ただ、そういう知名度もない、観光客にとって公共インフラも若干弱い、情報インフラもまだまだ、自責の念ですが、弱い、宿泊も弱い。

でありますけれども、一方、日本全国にある食のほとんどは留萌管内でとれる。しかもすぐそこにある。しかも、少量だけれどもいい品質である。また、山、川、海、すぐそこにありますという、限られたエリアの中で十分な資源がある。ならば、それを生かして何ができるのかという課題に対しては、我々は子供たちを呼んで、サマーキャップですとか、吹奏楽ということを今取り組んでおりまして、特に、例えば宿泊も、ホテルが弱かったら、どこかで合宿をしましょうとかという活動なのですけれども、ことしで４年目、福島の子供たちを呼んで、ことしからは全国、全道の子供を呼ぶという拡大をねらっており

まして、また、植村会長がおられます、全国、全道の青年会議所の会長をやられています。留萌は留萌青年会議所がありまして、そこのメンバーが中心となりまして、去年から、よその町村の合宿事業、吹奏楽を呼びまして、地元の高校生たちと交流させながら、宿泊をしながら、合同練習をするということでして、この担当者から聞くと、これはお礼かたがたなのですけれども、これが実現できたのは、留萌、深川の高規格道路があったからであると。これはなかなか平坦なまっすぐな道がないと、高価な楽器を運ぶポテンシャルがないのだということを彼が強く訴えておりましたので、ここでお話ししておきます。

また、話は変わりますけれども、実は留萌市というのは、市民力が非常に高いというふうに自負しておりますし、そういう評価も受けております。エフエムもえるも、当時、総務大臣から表彰いただいて、市民主体のまちづくりプラットホームという位置づけでありましたし、また、有名な三省堂が、これもたしか、ちょっと数字が定かではないのですけれども、３０万人を切るまちには書店はつくらないよという一方の方針があったらしいのですけれども、２万３，０００人を切るまちにつくると、これも最後の留萌資本の書店が閉まるという危機感を覚えた、主に女性の方々が中心になって、誘致をする。三省堂を呼び隊を結成しまして、そのあとに、できたからさよならではなくて、三省堂を応援し隊ということで、いまだにそういう活動を続けておられるという、今、うちの番組を持っていただいている、読み聞かせをやっていただいているのですけれども、そういう市民意識は非常に高いのですが、ただ、ここで言えるのは、市民、市民といえども、これはやはり行政の、特に地方の開建さんや振興局、また、自治体もそうなのですけれども、市民は主体なのですけれども、側方や後方からしっかりとその枠を支えてくれていると。これはもちろんお金もあるのでしょうけれども、お金というだけではなくて、人脈だったりとか、ノウハウだったりとかということが言えます。特にエフエムもえるをつくったときも、個人的にかかわって頂いた、実は開建さんの職員の方なのですけれども、僕に、あなた、こういうまちづくりをやってみたいのだったら、こういうのどうということで、コミュニティ放送局を紹介して頂いたというのがきっかけでして、そういうノウハウを持っていらっしゃる行政の方々が地方に寄り添った支援をして頂けというのが非常に重要なポイントだなということが言えます。

ついては、４点お話ししたいのですが、地域のインフラは、先ほど言いましたとおり、地方であればあるほど、吹奏楽の例もあるとおり、人がなかなか来ないという現状があるがゆえに、絶対に不可欠なものである、社会インフラは必要であるということと、２点目、地域の実情を知る地方の部局、これがなくなっては、なかなか我々の声が中央に届きません。どんなに我々がいい案を持って、どんな形で頑張ってみても、なかなか届かないというところがありますので、市民主体を支えるノウハウ、人脈、場合によっては予算ということはしっかりとして部局に頑張って頂きたいなというふうに思っております。

また、どんなにすばらしい企画でも、また行政が主体ではならんということで、住民の主体性を持ったまちづくりということで、資料にも一言書いてありますけれども、コミュ

ニティ・シンク・ドゥ・タンクというふうに呼んでおります。考えるだけではなくて、我々みずから動く、課題を解決する住民のネットワーク、そしてそのプラットホームということで、それを今つくりつつありまして、５月には組織化ができるだろうというふうに考えております。

最後、田舎であればあるほど、おもしろいことができるのだというマインドをぜひつくって頂きたいですし、僕らもその覚悟でやっております。というのは、主体性を持って意識の高い方は、結構な確率で、先ほどのお話のとおり、行政に就職されたり、それはそれで結構なのですけれども、中央に出ていってしまって、なかなか帰ってこないということですので、ぜひ田舎に行けば行くほどおもしろいことができる、そういうことができるのだよという政策とマインドをともにつくり上げて頂きたいなというふうに思っております。極端な話をすると、やる気がない１万人より、ここで頑張るぞという１００人のほうが魅力的な地域をつくれるという自信がございます。多様な魅力ある地方の集合が魅力的な国家をつくるという覚悟で、２万３，０００人のまちから頑張っておりますが、これは先ほど大臣が御挨拶されたときにおっしゃられました、地域の温度差、これが対流をつくる。対流をつくるのは地域の主体性であるというふうに考えております。

以上です。

○司会　ありがとうございました。

ここで、林様におかれましては、所用のため、退出されます。本日はお忙しい中、ありがとうございました。

続きまして、後藤田様、お願いいたします。

○後藤田氏　スマート農業の実践と、ＩＴ農業技術の導入と実現に向けて、ちょっと説明をしたいと思います。

先ほども言いましたように、資料の真ん中にある、まず国営の事業です。真ん中のあたりに６５枚の田んぼが、この国営事業の大区画化により、４枚になって、１枚平均が約６ヘクタールと大きく、みんなによく聞かれるのですけれども、こんなに田んぼをでかくしてどうするのだと言われるのですけれども、うちらにとっては、やっぱり効率化ですよね。農業に対して、耕耘から管理作業の全てにおいて、田んぼがでかくなればなるほど効率化が図れるので、スマート農業の実践を行ってまいりました。

その中で、隣に載っている、ＧＰＳのモニターを導入して、田んぼがでかいから、人間の目では全然わからないのです、水張りをしたら。車のナビゲーションと同じで、自分がどこを走ったか、次にどこに入るかというのを教えてくれるシステムなのです。今、これは完全に「みちびき」が、上に上がっている数が少なくて、１００％の精度ではないのです。

そこで、ＩＴ農業研究会を立ち上げて、この精度をもっとよくしようと。自分たちの地区に無線基地を立てて、ＧＰＳから無線基地局に落として、無線の電波でＧＰＳに電波を届かせて、精度が３０センチから正確な動作が行える、５センチぐらいの誤差までにもっ

ていけるシステムになりました。

その中で、野口教授と、農業用の無人ロボットを、うちの会社の持っている６．８ヘクタールの田んぼで５年間、実証試験をしてまいりました。最初はやっぱりみんな機械だから、人間味、愛情がないから、そんなの無駄だとかいう反対意見もありました。でも、実際、自分が近くで見て、確かにすごい、俺らよりやっぱり正確なのです。何にしても、やっぱり機械ということで。一番一緒に作業をして魅力的だなと思ったのは、代かきです。人間が、ある程度真っすぐはいくのですけど、機械が揺れ動くほど泥が寄って整地にならない。無人は人間よりも真っすぐいくので、ほ場がすごい平らになって、水管理作業など、すごい楽になるのです。

去年のシンポジウムでもちょっと発表させてもらったのですけれども、とりあえずことしは試験が満了して、終わったよと、野口教授が発表して、あとは商品化したいという話があるのですけれども、やっぱり日本では無人化、無人で作業を行うという法律がまだ定められていなくて、実用化には向けられないと。でも、野口教授に話はしたのですけれども、安全性の面もあるのですが、今のままでは実験で終わってしまう、このまま試験で終わりだよというものに僕はしたくないと思っているのです。これが本当に日本できちんと確立されて、うまく農業機械と併用していけば、本当に日本で無人の機械が生まれて、世界に日本の農家の技術、農機具技術の先進国となって、日本が先頭に立っていくような事業だと思うのです。それに向けて、やっぱりこのままだと、よかったね、無人ですごいねで終わってしまう結果になってしまうと思うのです。だから去年も農林水産省の人とお話をしたのですが、そのときに、予算をつけて、うちの会社でいいから、実証試験、デモ車で１年間俺に貸してくれと。そこで本当に安全性をきちんと確認をできるのか、無人がだめなら運転できない人間を誰でもいいから乗せて、とりあえず有人、運転は無人なのですが、人を乗せれば有人ではないですか、危なくなったらリセットボタンがあるのです。そういうので試したりとか、本当に自分たちが求めるコストパフォーマンス、１台は機械に俺が乗って、もう１人、本当は従業員がいるのだけど、そんなの無人化だから要らないよと。だから一緒に田んぼ起こしをして、１人の労賃で済む。畑とか持っていれば、次の日雨だよと。でも１人では作業が間に合わない。無人のトラクターが２台あれば、自分１人で２台動かしながら、全て一晩で終わらせられるという作業も可能だと思うのです。

だから本当に僕たち、今、ＩＴ農業研究会としては、本当に無人の能力が必要なところまで来ているのです。こうやってせっかく国から補助を出してもらって、大区画な、１カ所である程度面積をこなせる、機械がどっちに行っても危なくないようなほ場にしてきたので、本当にうちらの地区を特区として認めてもらい、無人のトラクターとかを導入できるような地域にしてほしい、モデル地区にしてほしいかなと思うのです。

野口教授にも話はしているのですけれども、今、農機具は高いじゃないですか。１，２００万円、それにその機械がついたら３００万円、１，５００万円になると普及率が低くなるじゃないですか。そうしたら、１，２００万円だから、無人なんか要らないよという

話になってくるじゃないですか。多分、単独でやるから、余計誤差がある、暴走したりすることがあると思うのです。それを今、農機具屋と、野口先生の研究したものをうまく一体化させる、リンクさせた上でやれば、暴走したりとか、そういうことは絶対ないのではないかなということが可能になっていくと思うのです。本当に無人に向けてのＩＴの導入に向けて検討してもらいたいなということをお伝えしたいと思います。

○司会　ありがとうございました。

続きまして、堀様、お願いいたします。

○堀氏　きょうはこのような機会を頂きましてありがとうございました。

まずはこの資料を見て頂ければと思います。うちはホリというブランドと北菓楼というブランドと二つございます。二つを通してとにかく取り組んでいるのは、次のページになりますけれども、クレド。５年前に兄が急逝しまして、私が今、引き継いでおりますけれども、これをつくりまして、社員一丸となって、ここに書いてある１番、経営方針の中には、北海道素材へのこだわりというのを書いてあります。きょうも、ちょっと恥ずかしかったのですけれども、夕張メロンカラーのネクタイをしてきました。やっぱり我々自身、宣伝していかないとだめだと思っております。

現在、餅米ですとか、ハスカップであるとか、いわゆる北海道の海産物、農産物、それとバター、卵、あるいは牛乳、チーズなどの畜産物、とにかく北海道の素材をどうやって生かしたらいいだろうかということを考えております。ですから、来月も、白老町というのがございまして、白老町のタラコを使ったおかきをつくろうということで、来月、新発売を考えております。

次のページは、先ほどお話ししました札幌医科大学様との包括連携協定、これを今取り組んでおります。これも来月、新発売する予定のシソとハスカップのゼリー、シソは仁木町のシソです。ハスカップは美唄のハスカップを使用しています。これはやはりこれからの健康を考えた、あるいは一部中東の方も来られるものですから、アルコールであるとか、あるいは、豚は関係ないのですけれども、とにかく海外の方が買って頂ける商品にしていきたいと考えています。

その下ですけれども、これは今、ようやく札幌の路面店が来年の３月３０日、オープンするのですけれども、とにかく６次産業、畑があって、加工させていただいて、それで販売店をということで、札幌にようやくこの店舗ができるので、今張り切っているところでございます。

そのためには、何と言っても人づくりというふうに思っています。ですから、今、保育園も検討しておりますし、高齢の方、いわゆる先ほどお話ししました７０歳以上の方でも、やる気さえあれば仕事をしてもらうと。最高７７歳の方が本当によく頑張っておられて、本当につくづく思うのは、年齢ではなくて、やる気、意欲のある人をこれからも採用していきたいと思っています。特に毎年１０％ほど新入社員、あるいは中途採用しているところです。これからも人づくりが大きな北海道のキーワードになってくると思います。

そういうことを考える上で、とにかく北海道は、玄関、千歳空港をますますこれから国際線がどんどん入ってきてもらえるように、あるいは２４時間、空港が動くように、ひとつお願いしたいと思っておりますのと、高速道路も、ＬＣＣもそうですけれども、本当に道外の出張がしやすくなりました。日帰りで帰ってくることもできるぐらいのことになってきました。ですから、高速道路もさらにお安くしていただいていますけれども、価格なども検討して、利用者がどんどんどんどんふえていくことが一番北海道の景気がよくなることにつながるのではないかと思って今考えております。

それと、地元砂川で特に思うのは、札幌のこの店舗をやっている大手ゼネコンさんはすごく忙しいというのですけれども、砂川の業者さんはすごく暇だとおっしゃっているのです。だから、この落差は何なのだろうかと。やる気があるかないかということもあるのでしょうけれども、とにかく大手ゼネコンさんは、もう勘弁してほしいというぐらいだとおっしゃるし、地元砂川は、何かないだろうかと。特にことしは雪が少なかったのです。建設業者さんは、冬は除雪をします。その除雪の雪の仕事がないものですから、本当にそういう点では格差というのはあるのかなと思って、今考えています。現在、うちの会社は３６５日、朝の２時からシュークリームをつくっております。あるいは、かき餅は朝５時から夜１０時までつくっています。本当にみんながよく頑張ってくれて、あるいは真面目な人ばかりが勤めてくれて、本当にありがたいと思って、最近は工場へ言っても、ハッパをかけるというよりも、ありがとうというばかりで、何か指導になっていないように思うのですけれども、とにかくもし機会がございましたら会社も見て頂ければと思いますし、とにかく今思うのは、田舎だからできること、今だからできることということをこれからもとにかく前へ前へ進んでいけるように取り組んでまいりたいと思います。

おかげさまでうちの長男と兄の次男がことし４月から帰ってきて、跡取りも決まりまして、ことしの４月からは厳しく指導しようと思っております。

以上です。

○司会　ありがとうございました。

続きまして、西田様、お願いいたします。

○西田氏　北海道酒造組合でございます。

前段でちょっと基本的なことをお話ししましたので、第２部のほうはポイントだけ御説明させて頂きます。

北海道の日本酒メーカー、かなり今、ちょっと調子がよくなってきまして、ここが頑張れば北海道の生産農家が潤うという、間違いのない構造になっておりますので、ここはきっちりと連携をとってやっていきたいと思っております。

問題は、ではどこまで売れるかという問題なのですけれども、売り先の話をしたいと思うのですけれども、今、私どもでうまくやっているところ、幾つかあるのですけれども、大きく分けますと、飲食店の活性化事業でございます。それから、観光事業の推進です。それともう一つは、輸出振興事業と、こういうことで、消費者等への直接ＰＲもやってお

りますけれども、この消費者等への直接ＰＲ、それから飲食店の活性化事業のほうについては、鮨組合、麺類組合、個々の飲食店とのコラボで、結構ここは前向きに進んでおりますので、ここは順調にいっているということでパスをして、観光事業のほうに移りたいと思いますけれども、観光事業のほうもかなりうまくいっております。

そういう中で、素朴な悩みが幾つかありますので、その辺を申し上げたいのですが、例えば札幌雪まつり会場におきまして、西１０丁目に北海道地酒販売所を開設しまして、これで７年やったわけでございますけれども、大変繁盛店になりまして、７日間で約１万２，０００人ぐらいの方が来ていただいております。その中に外国人も相当の数来られるわけです。私どもの地酒販売所は、札幌商工会議所からおもてなし店ということで、外国語のできる店ということで、外国語のバッジをもらっております。現在、英語、中国語はＯＫなのですが、ただ、これもそういう言葉ができるアルバイト頼みなので、では来年はそういう人が見つかるかどうかというのが、実は雪まつりが終わったばかりなのですけれども、毎日寝ても覚めても来年の人材をどう確保しようかということで悩んでいるところでございます。観光もそうですし、輸出も観光につながるのですけれども、どっちもやはり外国語ができるという強味が絶対ありますので、意外と外国語対応というのがなかなかうまくできないという悩みで、何かいい知恵がないかなということで悩んでおります。

あとは、ここのテーブルの皆さんにはパスポートというのを二つ配付しておりますけれども、これは日本語版と英語版と二つありまして、北海道酒造組合は、組合員としては日本酒と焼酎の組合なのですけれども、そういう小さな領域にとらわれないで、私どもはワインであれ地ビールであれ、何でも一緒にオール北海道でやろうよということでまとめております。それで北海道広域道産酒推進協議会というのができ上がりまして、これの事務局がＪＴＢにお願いしているわけで、そこで北海道の酒蔵、工場のスタンプラリーを企画して、これで３回やりました。２６年は、これが１冊５００円なのですが、１万冊売れました。

ただ、問題としては、これは各メーカーの有料参加なので、最初の参加費を払わないとこのスタンプラリーには載らないということになっております。やはり中心は道央なのですけれども、道東がちょっとなかなか参加してくれないという弱味がございまして、これは北海道はとても広いので、やっぱり課題は交通アクセスで、何万円かの会費、参加費を払っても、自分のところにはお客が来てくれないという、そういう計算から参加しないのかなと思っているので、やはりこれまでの説明された方で、交通アクセスを随分強調されているところがございましたけれども、やはり北海道の広い地域の中の交通アクセスがもっとよくなれば、オール北海道でますますいけるのだろうと、そういうことでここは期待しているところでございます。

あとは、輸出振興のほうでございますけれども、直接外国に売りに行くということもやっております。いろいろな官公庁のお世話になってやっております。今、オールジャパンで、とにかく日本酒は輸出しろということで、上からどんどん球が降ってきておりまし

て、私のところへも、受けるキャッチャーは私１人しかないないのに、大体七つの官庁から、何とか輸出しろ、輸出しろと言われて、私も音を上げているのですけれども、何とか頑張って体の続く限りやっております。

そういう中で、やはり輸出というと、すぐメーカー頑張れと、こういうぐあいに国のほうはやってくるのですけれども、私はやはり直接メーカーが外国にお酒を持っていけるわけでなくて、その中に中間流通というは必ず入ってくるわけで、国内の輸出業者、それから、それを受け取る相手国の輸入業者、ここのルートが確立しなければいけないので、そういう流通業者の活性化、バイヤーの活性化が望まれるところなので、国のほうもメーカーばかりではなくて、そういう流通業者のほうにも頑張れとハッパをかけて頂きたいなという思いがございます。

それと、ことし、新千歳空港の国際線エリアで日本酒、それから焼酎の試飲即売というのをやろうと、そういうぐあいに考えておりまして、一部先行してやってみたのですけれども、実に売れるのです。これをものにしない手はないということで、何とか図ろうと思っております。やっぱりここで問題になるのは、言葉のできる売り子なのですよね。そういう外国語対応がどうやったらうまくできるか、そういう人材をどうやって確保することができるか。酒のメーカーというのは零細企業が多いものですから、なかなかそういう人材はいないので、結局外国語のできるアルバイトをどこかから見つけてこなければいけない。そういうことで、何かいい知恵があったら教えて頂きたいなと、そういうぐあいに思っております。

この国際線の試飲即売というのは、もう羽田、成田では当たり前にやっているわけでございますが、ここは国からの助成金をもらってやっております。そういうわけで、新千歳空港も頑張っていきたいと、そういうぐあいに思っております。

それともう一つ、北海道はちょっと公共Ｗｉ－Ｆｉが立ちおくれている。私も外国に仕事でいきますと、Ｗｉ－Ｆｉは当たり前に使えるのですけれども、公共Ｗｉ－Ｆｉをもっともっとやっていって頂きたいなと、そういう思いでございます。私個人的には、ポケットＷｉ－Ｆｉを二つ持っていまして、外国から来た方には、ポケットＷｉ－Ｆｉを貸して対応してもらうのですけれども、公共Ｗｉ－Ｆｉの普及が望まれます。

以上でございます。よろしくお願いします。

○司会　ありがとうございました。

佐伯様、お願いいたします。

○佐伯氏　私は農業と食の観点から北海道の活性化に期待することということでお話をさせてもらいます。頂いたテーマが幾つかありまして、人が輝く地域ということと、世界に目を向けた産業ということを軸にというお話、後半からメールで頂いたのは、２０５０年に向けた価値創造空間という言葉がかたいから、どうにかならんかみたいなお言葉をいただいて、これはやはり専門の、恐らく博報堂さんとか電通さんの力を借りたほうがもっとやわらかなイメージが出るのではないかと思いますけれども、ただ、頂いた宿題はそれな

りに、私の力不足ではありますけれども、答えておかなければいけないと思いまして、何をもって価値とするかということはもう少し議論していく必要があるのではないかと思います。例えば、要するに生産性を上げて所得を豊かにすることが価値なのか、あるいは、医療から教育から子育て支援まで含めて、老後の福祉まで含めて、世界に冠たる北海道にしていく、要するに暮らしやすさとしての価値を表現していくのか、それはやはり違ってくると思いますので、その辺をある程度北海道として表現したい価値というのをもう少し分析していくと、この言葉がやわらかいと思うかかたいと思うかは別としても、北海道らしい、イメージされることはよくわかるのですけれども、もっと何をやりたいのかというのは、恐らく道民に伝わっていくのではないかなという気がしますので、キャッチコピーはできませんでしたけれども、そういう意図でということです。

あと、頂いた四つの観点があって、イノベーションによる農林水産業の振興と、高付加価値化を図る食の総合拠点づくり、それから食の海外進出、地域資源を活用した農山漁村の活性化という四つのテーマで、多分これは６分では話ができないと思います。ですから、ある程度私も資料をつくってきました。６－１という私の資料でお話を、本当に切り取る形で、もう一つ、６－２というのは、私のいわゆる全国ネットワーク型の生産者集団の紹介ですので、これは後で参考にして頂ければと思います。

資料の内容は農業の今日的課題ということで挙げました。

一番目の課題はまず経営者の育成が急務です。統計を見るまでもなく、百五、六十万人の販売農家が、１０年したら１００万人は退場するので、５０万人で日本の農業をやるか、それにプラスをしていくかという、いわゆる経営者をどうするかという課題があります。そのために農業外から参入させてもいいでしょうし、あるいは農業と無縁の、いわゆる新規参入という形で促してもいいと思いますけれども、それでは恐らく減り方に追いつかないと思いますので、今残った数十万人、恐らくもっと減ると思います。４０万人ぐらいの専業農家の核の農家をどうするかという議論と、それから、非常にぜいたくな趣味で農業をやっている方もいます。この前、愛媛のある農家が、農協職員をやめて、５反の田んぼに１，５００万円の機械投資した、これは俺のぜいたくだよと、そういう人はいわゆる農業政策から外してもらって全然構わないのです。ですから、専業農家で生きていく人たちが活躍できる政策と、いわゆる老後の農業を楽しむ人の農業というのを分けて考えて頂きたいと思います。そうすると、ゆるやかな体質転換、要するに農業の地域の中でも新陳代謝が起きてきて、強い体質を持った魅力ある専業農家が出てくると思います。

あと、労働者の確保、この問題は地域へ行くとどこでもあります。農業に限らないことでありますが、特に専業農家ほど大きな問題になってます。それも園芸農家ほど多いです。これを今、地元の調達――調達という言葉はよくないですね。働いて頂ける方を地元ではなかなかもう採用できなくて、昔は出面さんと言われる方がいましたが、その方たちも７０代、８０代になって退場していった。それを海外労働から入れるということでは、入管の問題の中で、非常に窮屈な制度になっています。短期間労働が制約されていたり、

せっかくスキルを持ったのに、２年目は来られないとか、そういった日本の制約があります。海外の例を見てもタイも韓国も、この前行ったニュージーランドなども、短期間労働で複数年来られる制度にしております。多分、日本はこのままいくと、特に集約的農業の部門の中では、周辺諸国に労働問題で負けていくと思います。輸出先進国の最低賃金も高いです。ニュージーランドでは時間最低賃金が時給で１，３００円ぐらい、スキルを持った方は２，５００円ぐらいまで時給をもらっている。その時給を払える生産性を持った農業に変えていかないと、これからの農業を維持できないということも考慮していかなければならないと思います。

あとの課題の生産資材の高騰は皆さんよくわかっていて、これは為替の問題ですから、我々が何を言ってもしようがないなと。それは政策として持った課題ですから、ただどこかでもう少し生産コストが下げられないかなとは思っています。

物流問題は、これは物流というか運転規制といいますか、それはあって当たり前のことで、今までが非常に過酷な労働を強いてきたというのが農産物流通の世界であったと思いますので、別な、要するにコストを下げる流通手段というものを考えなければなりません。トラック輸送と、ＪＲ貨物輸送と、意外に活用されていないと思う船の輸送というものをうまく組み合わせられないかと思います。もう一度海上コンテナなどの活用とコールドチェーンを整備して、海外から２週間かけても日本に持ってくるわけで、沖縄まではちょっと遠いですが、九州まで持っていっても、多分４日ぐらいで行くと思います。あとはコールドチェーンによる鮮度保持の問題で、それで物流コストを下げられるのではないかと思います。それは小売との連携もなければいけなくて、発注から納品まで２日とか３日という小売業態の姿もおかしいので、その辺をもう一度全体的に変えていく仕組みづくりが、日本の農業を変えていく可能性にもつながると思います。

あと、政権の中で言われている６次産業化と輸出戦略というところでありますけれども、これに関しては、後段で述べさせて頂きます、それぞれ課題があるということを参考資料として述べさせて頂ければいいと思いますので、四つのイノベーションということで書いてあります。いわゆる生産者自身が変革していく場合、それから、地域連携なり農商工連携なりをしながら価値の創造をしていく場合、いずれにしても最後のほうのこのページの一番最後に課題を書いておりますので、見て頂ければと思います。

一番最後の２ページですけれども、結局、地域というのはささやかな成功を積み重ねていくしかないと。農業の中でも、大きな変革をしよう、イノベーションを起こそうと６次化ファンドみたいなのができ上がったのですが、ほとんど利用されていません。それは投資規模が大き過ぎて、要するに農業者も、それにかかわる人たちも想定ができないのです、リスクを。そういったことではなくて、ささやかな成功を積み重ねる。

もう一つは、食と農と地域再生に関しては、新たな需要を創造することができるのか、あるいは、今まで支えていた担い手の退出を促して、新しい登場者をつくっていくことで、恐らく日本のパイはそう変わらないので内需を満たせると考えます。新しい需要の創

造というのは、海外か、あるいはインバウンドみたいなものを引き込むかというところで、その主役になる人は誰なのかということを明確にしていくことで、より戦略が立てやすくなってくると思います。

以上で終わります。

○司会　ありがとうございました。

クリーン様、お願いします。

○クリーン氏　きょうは二つの提案に絞りたいと思いますけれども、最初は食と観光です。２番目はワークライフバランスなのですけれども、食と観光に関しては、北海道は観光地としては十分成り立っていると思いますけれども、先駆的な形で食と観光のつながりをさらに展開させれば、より魅力を引き出せると思います。

具体的に北海道にしかないような、わりとおいしさのわりに知名度がまだ低いというものがいっぱいあると思うのですけれども、最初に日本酒、先ほど西田さんもいろいろ発言したので恐縮なのですけれども、日本酒の事例を取り上げたいと思います。

私の資料に、食と観光の写真が載っているのは、付加価値の事例として、２０１３年に３００年以上の伝統ある山形の高木酒造と先駆的なデザイン会社ｎｅｎｄｏとコラボした、サッカー選手の中田英寿さんがプロデュースした日本酒の事例なのですけれども、ぱっと見ますと、日本酒より、多分、香水とか、何かコスメ関係の品物に見えるかもしれませんけれども、その驚きの瞬間とかありますよね。それが結構付加価値という感じで思いまして、やっぱり今まであったようなものを超えて、何か新しい付加価値をつくってブランド化するというのは、やはりさまざまな背景を持つ人材が一緒に事業として組むというのは非常にやりやすいと思いますし、おもしろい、新規性があると思います。中田選手の日本酒の事例は、震災後の日本の応援という、そこもありましたので、やっぱり社会貢献というソーシャルな側面もありまして、そういう意味でも付加価値があったと思います。

やはりもう一つのそういう付加価値の事業として、今回はヨーロッパのドイツに移動したいのですけれども、次のページの写真は、ベルリンにある和食の店なのですけれども、ＵＬＡというレストランで、わりと最近できた店なのですけれども、そこのレストランの中に、和食以外に日本酒バーもありまして、最近、確かにヨーロッパでも日本酒の人気がぼちぼちふえてきまして、日本の居酒屋とちょっと違って、本当にちょっとしゃれているような空間で、少し豪華な感じで日本酒を味わうという人数が少しふえてきまして、そういう意味では、やはり海外アピールが、西田さんもおっしゃったように、これからの一つの方法になるのではないかと思います。

もう一つ、事例として、その下に載っている写真なのですけれども、ちょっと多分日本にないようなお寿司の新品で、カクテルトマト、小さいトマトの手まり寿司なのですけれども、それが非常にそのレストランの中で人気がありまして、なぜかといいますと、ベジタリアンとかビーガンの人、お野菜とかほかの食生活の制限がある方が非常に多くなって

きまして、そういう意味でも北海道で非常においしいお野菜がいっぱいありますので、例えばキノコだけのお寿司とか、それも海外向けのベジタリアンの観光客にとっては非常に魅力のあるメニューではないかと思います。

そういう意味では、やはり何か新しい新品のそういう付加価値をつくるというのはいろいろな意味でできると思いますし、あまりお金もそんなにかからないという感じで、やりやすいと思います。

もう一つは、ワークライフバランスなのですけれども、やはり今まで北海道スタンダードというキャッチフレーズがあったと思うのですけれども、それが主にハード面で、これからソフト面で北海道スタンダードをつくっていったらどうですか。高いライフクオリティと、やっぱり競争力を目指す先駆的なそういう仕事の仕方を北海道拠点でつくれば、非常におもしろいと思います。

つまり、現在の世界のさまざまな国における個人の平均年間総実労働時間を統計で見ますと、最初のページなのですけれども、日本は非常に長いですね。日本は１，７４５時間で、アメリカより少し短いのですけれども、ドイツは１，３９７時間で、フランスも１，４７９時間で、明らかに少ないですね。

次に、その前のページはノーベル賞の統計なのですけれども、一応イノベーションの象徴でノーベル賞事例なのですけれども、ごらんのように、アメリカは非常に高いのですけれども、ほかのノーベル賞のランキングで高い国は、イギリス、ドイツ、フランスなどの国は、労働時間を見ますと、非常に短い国が多いのです。逆に、もちろん直接因果関係は、いろいろほかの要因もあると思うのですけれども、例えば福祉国家の充実とか、教育の文化とか、いろいろな歴史の背景があると思うのですけれども、このデータをきっかけに、やっぱり仕事の仕方、余暇の過ごし方、それをもっと考え直せばよいのではないかと思います。

上記を踏まえて、新たな北海道総合開発計画や行政に期待することなのですけれども、第一に、食と観光がつながるイノベーションをはらむアイデア、産品のコンペの企画、そういうフレームワークをつくればどうですかね。さっきの、やはり皆さん御指摘頂いたつながり、北海道にいろいろなクリエイティブな方がせっかくいるのですけれども、その間のつながりが足りないということで、やはりそういう現地の若手デザイナーとか、アーティスト、食品関係者、観光関係者など、さまざまな方に新しい発想を、そういう提案できるような枠を何か考え、提案することで、雇用とまちづくりにも至ると思いますし、道内の発信力もさらにふやし、長期的に、やはりローカルアイデンティティもふえてくると思います。

オーストリアには、例えば役場のほうがクリエイティブ系向けにコンペの企画、小さいスケールの助成金のフレームワークがあるので、そういうディパーチャーというプログラムがありまして、出発点という意味、そういうのがもしかしたら参考になるかもしれないと思います。

第２に、個人のポテンシャル、クリエイティビティ、先駆性をもっと効率よく発揮できるような仕事の仕方を実践できる対策は、北海道開発局の中でも、実際、対策して頂ければ、北海道の魅力がさらにふえてくると思います。

以上です。ありがとうございます。

○司会　ありがとうございました。

続きまして、植村様、お願いいたします。

○植村氏　日本青年会議所で大変いつもお世話になってございますが、今回は北海道地区協議会のことに限りまして御紹介をさせて頂きたいと思うのですけれども、私たち青年会議所、ＪＣは、皆様も御承知のとおり、日ごろ、仕事をさぼってというか、仕事を人に任せて、経営者に少し怒られながら、まちづくり、人づくりをやっている団体なのですけれども、北海道地区協議会は１，４００人いる中で、３００人ほど出向していただいています。自分の地域を離れて北海道の全地域のいろいろなまちづくりを、いろいろと活性化することについて考えて活動しているのですが、出向すると、１年間で６万キロから１０万キロはみんな運転をしていると思います。そして北海道をくまなくいろいろと交流をし合っていまして、まず地域と人との結びつきというのがすごく強い団体だと思いますし、まず１年間の出向の中で、本当に人と人とのつながりが強くなれる団体が私たちの特徴的なところだというふうに思います。

でも、わりとやはり私たちの活動自体があまりわかっていただいていないというか、大変堅苦しく見られているところがありまして、私はそれがちょっと嫌で、ことしは、やはり皆さんと一緒に地域をつくり出していくきっかけづくりをどうにかできないかなということで、ことしの特徴的な委員会の設置としては、地域経営推進委員会ということで、地域の団体の方たちともより一層ＪＣが結びついていこうということで、今、道の駅の方だったりとか、シーニックバイウェイということで、今、そちらに座られていますイズミ課長とも一緒にいろいろと今話をさせていただいていましたり、各団体の方たちのつながりがということでも、今、意識して動かさせていただいていますが、また、地域連携向上委員会というのも設置させて頂きました。これは、言ってしまいましたけれども、地域の方たちのつながり、団体とのつながりということで、どういう形で地域づくりができるかということの可能性をつくり出していきたい。

また、ことしは国際的な観点で、グローカル推進委員会ということで、海外の方たちに対しての滞在型観光をどういうふうに提案をしていくことができるかということも盛り込みました。

それと、情報発信をすることもそうなのですけれども、北海道の青年会議所の中でも女性メンバーが多くなってきまして、女性のメンバーとの連携を強化するということで、女子会というのも設置をさせていただいています。

また、先ほどもちょっと冒頭に言ったのですが、この１０年間で５２組織あったのが、今４８しかなくなってしまいまして、また、メンバーも徐々に減っています。地域の弱体

化とともに、やはり青年会議所でも空洞化が多くなってきていますので、そのあたりをどういうふうに地域間で縮めたり連携していくことができるかなというところで、今挑戦をさせていただいているのが、今御紹介させて頂いた、特に三つの委員会でございました。

そして、私たちが日ごろすごく思っているのが、やはりイノベーションという中では、人と人との出会いであったりとか、人と人とのつながりの中で、相手の考えている思考を自分の中でも向き合う中で、こんな新しい発想があるのだなということの出会いをたくさん構築することではないかなというふうに思っています。ですから、私たちが何かをつくるということよりも、そういったきっかけの場所をつくるということの中で、ことしもＪＣフォーラム、第４回になりました。皆さん、黄色と青の「イノベーションってなんだろう」という、こういった道民の方たちと私たち青年会議所のメンバーがともに考えられる場所をつくるということもまず一つですし、これをきっかけにして、１年間、道民の方たちとともに実践をしていくということで、ことしは地区大会というのが９月にあるのですけれども、そこまで、青年会議所だけではなくて、皆さんとともにつくり上げていきたいというふうに思ってございます。

今ここにも佐藤先輩もいらっしゃいまして、田中先輩もいらっしゃいまして、折谷さんのお父様とも一緒に、いろいろと先輩の方たちもともに今活動させていただいている段階なのですけれども、そういった地域の先駆者の方たちにもいろいろと御理解頂いた中で、ともにさせて頂きたいなというふうに思っています。

また、今、私たちがとても願うことは、やはり地域とともにというのもあるのですけれども、先ほどから産学官というか、いろいろな組織の方たちとともに交わることもすごく大切だというふうに思っていまして、ぜひ太田大臣にお願いしたいことは、国土交通省の皆様、若い方たちともぜひ話し合える場所というのでしょうか、青年会議所にもぜひ入会頂いたりとか、地域の方たちの中でもいろいろなさまざまな団体の方たちにもぜひ私たちも勧誘をさせて頂きたいというふうに思っていますので、そんな中で、いろいろな方たちと話し合える場所を築いていきたいなというふうに思ってございますので、よろしくお願いします。

○司会　ありがとうございました。

続きまして、折谷様、お願いいたします。

○折谷氏　それでは、主な活動を３点紹介させて頂きたいと思います。

私の資料の右下にページの番号を記載させていただいております。③と書いてありますところから始めさせて頂きます。

まず一つ目は、地域協働です。お花の活動を国道５号函館新道や、道道函館空港線などで行っております。函館新道のジャンクション周辺で~~は~~、小中高校や沿線の町会など２５団体、約８５０人で活動しております。春に土起こしをし、植栽いたしまして、秋に花の撤去、冬には手づくりキャンドルなど、年間を通して地域の皆さんと一緒に活動させていただいております。お花は生きておりますので、植えた後、手入れをしなければ枯れてし

まいます。春から秋まで、長い間きれいに咲かせるためには、活動を実施する人材が必要です。日ごろの手入れは、町会の役員の方や婦人部の方など、元気な高齢者の皆さんに御協力いただいております。８５０人のうち５００人くらいは小中高校生です。高齢者の方が小中高校生と一緒に活動することで、世代間交流により生きがいを感じ、健康高齢者の創出につながります。人口が減少しても健康な高齢者にご協力いただくことで活動も継続可能だと思います。函館新道のお花がすごくきれいだと評判になり報道などで取り上げて頂けようになりました。また、活動を評価頂き、表彰もいろいろいただいております。そうすると、最初はあまり意識しないで活動に参加していた方も、あの活動は自分たちがやっているのだと自慢したくなり、愛着が生まれ、地域の誇りの再認識にもつながっていると思います。

続きまして、資料４ページ目からは活動写真を掲載させていただいております。

⑤と書かれているところは、撤去した花をミミズの力で堆肥づくりを行っております循環型の活動ですが、これにつきましては、本日の資料の３－２のほうで添付させていただいておりますので、お時間ありますときに御一読頂ければと思います。

６ページ、７ページは、シーニックdeナイトの活動を掲載いたしました。

次、２点目のの活動を紹介させて頂きます。⑧と右下に書かれているところでございます。

外国人観光客へのおもてなしの活動をしておりまして、シーニックバイウェイの活動から、函館でのシンガポールドライブ観光の事例を紹介させて頂きたいと思います。

先ほどのお花の活動もそうですが、道を使った観光とまちづくり、道でつながる地元の思いが、迎える側も訪れた人にも伝わるのがシーニックバイウェイの活動だと思っております。

シンガポールの皆さんは、ドライブするのには国土が狭いですが、北海道には魅力あるドライブ環境の提供ができます。私たち函館で、何ができるか自分たちで考え、日本文化の体験がいいのではないかと思いまして、生け花、お茶、和服の着付け体験などを行っております。地域資源の活用としても、２０１３年から得意のいか踊りをシンガポールの皆さんにお伝えし、一緒に踊っていただいております。こちらは評判がよくて、毎回リクエストされるほど喜ばれています。

ここで⑮と書かれている資料を見て頂きたいと思います。レンタカーの現状が載っております。北海道における外国人へのレンタカーの貸し出し台数は２万１，８３５台までにふえました。私たち２００７年に活動をしてから、この表でもわかりますように、ものすごくふえております。月別では夏の７月が大変顕著に多く利用されておりますが冬期の利用も増加しております。外国人へのレンタカー貸し出し台数は、アジアが８７％となっております。

また⑧と書いているところに戻って頂きたいのですが、意見といたしまして、外国人の方がこれからもどんどんドライブ観光で北海道に来て、レンタカーを利用されると思いま

すので、安心・安全にドライブできる環境づくり、インフラ、情報、言語、レンタカーシステムなど、今後さらなる整備、充実を望んでおります。

資料として⑨、⑩に、当時の新聞に報道された記事を添付させて頂きました。⑪⑫⑬⑭は、シンガポールの皆さんと一緒に活動した写真です。⑬は、私たちの活動の原点であります、いか踊りを一緒に踊っている写真です。

最後、３点目に、クルーズ船でのおもてなしについて紹介させていただきます。港の活動で、メンバー数人が、イカマイスターを取得しております。函館には南茅部のおいしい昆布がありますので、南茅部の昆布で出汁をとり、いかめしをつくってクルーズ船で来られた方へいかめしの振る舞いをしております。函館の地域資源であるイカや昆布を活用しまして、ようこそ函館へという気持ちを込めて、外国人観光客の方へ振る舞うことで、言葉は通じなくてもお互いにうれしい気持ちが伝わってまいります。

以上、三つの事例からおもてなしの活動を紹介させて頂きましたが、おもてなしというのは自分の地域やまちが好きでないとできないと思います。また、思いだけがあっても活動を続けていくことはできないと思います。

日ごろ、国土交通省の皆さんには、地域住民のお一人といたしましても、私たちの活動を初めいろいろな活動に御参加いただき、御協力いただいておりますが、今までどおりというか、今まで以上にもっと御協力、御参加頂ければ、私たちの活動も、人口が減りましても、元気な高齢者の方もたくさんおりますので、１０年、２０年と継続していけるのではないかと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

以上です。

○司会　ありがとうございました。

最後になりましたが、阿部様、お願い申し上げます。

○阿部氏　縄文文化交流センターの阿部です。

資料２－２、「新たな価値を体感する空間の創造に向けて～命と自然、縄文とアイヌ文化」という資料をご覧ください。

めくって頂きまして、縄文文化の特徴と価値でございますけれども、縄文文化というのは、多様な自然環境のなかで、漁労、狩猟、採集を基盤として、１万５，０００年から２，０００年前まで続いた日本の先史文化でございます。

そして、その１万年間以上もの間、大規模な戦争がなく、武器を持たない時代が続いた、世界的にも非常にまれな文化であるということです。

また、土偶づくりや貝塚に見られるように、“命”を大切にした高い精神性を持った文化だという特徴があります。いま、縄文文化に対する関心が高まっておりますけれども、これは古いもの、すごいものが発見されたということではなくて、まさに社会の変容に伴う価値観の変化がこの背景にあるのだろうと思います。

日本には二つの文化、弥生文化と縄文文化がありますけれども、弥生文化というのは農耕ですから、人間が頂点にあって、自然を開拓しながら暮らしていきます。そして、効率

性、一極集中型の、後の律令制度のもとになるような国家みたいなピラミッド型の組織です。

一方、縄文というのは、自然の中で暮らしていますので、人間は自然の輪の一環なのだという考え方で、その社会も小さな集落が連携して一つの文化圏をつくっていく。こういった違いがありました。そして、まさに今現在、先ほど太田大臣から、これからは個性ある地域が連携して大きな効果をつくっていくというお話しがありましたが、まさに、これからはこういった縄文型の社会になってきているのではないかなと考えております。

めくっていただいて、一例として、縄文文化の精神性を御説明いたしますが、盛土遺構と貝塚というのがあります。

貝塚というのは、御存じのとおり、貝や動物の骨などを捨てたような場所です。ごみ捨て場だと言われておりました。ところが、こういうところから人の墓も出てきます。

もう一つ、盛土遺構というのがありまして、これは壊れた土器、石器が大量に出土するところです。これも一見するとごみ捨て場のように見えますけれども、ここにも人の墓があります。ですから、捨てたのではなくて、役割を終えたものの魂を送るということをしているわけです。

こういったアニミズム的な精神文化というのは、ずっと後のアイヌ文化にも引き継がれておりますし、こうした命やモノに感謝する気持ちというのは、古来からの日本的な心でもあります。この縄文時代から続いてきた“日本的な心”、これを新しい価値、新しい魅力として発信することが必要だろうと思っておりまして、この縄文文化とアイヌ文化が存在することが、北海道らしいの最大の魅力になってくるだろうと思っています。

縄文文化の普及と国際交流の事例として、南茅部の遺跡と縄文文化交流センターを載せております。

一つだけ御紹介しますが、真ん中の中段に子供の足形のついた土板がありますが、これは６，５００年前の粘土板でございまして、ここに亡くなった子供の足形をつけて、そして一定期間、家の中に吊しておいて、親が亡くなったときに一緒に埋葬されるというようなものでございます。子供を思う親の気持ちがよくあらわれた遺物だろうと思います。

また、めくって頂きまして、普及と国際交流の事例の(2)ですが、縄文遺跡を通して、児童生徒はもちろんですけれども、市民を対象とした体験発掘とか遺跡見学などをやっております。

そして近年、特に感じるのは、海外の人たちの縄文文化に対する関心度が非常に高いということです。２年ほど前ですけれども、ハワイのホノルルでアメリカ考古学会があって、私も縄文の話をしてきましたが、そこでも若い研究者が縄文文化を研究発表しておりました。その中で、共通して言っていたのは、サステナビリティということでした。

こうした縄文の価値を世界に発信していこうということで、今、北海道と北東北３県が世界文化遺産への取り組みを行っております。６ページですけれども、左側の図は当時の縄文時代の文化圏を示したものです。日本列島全体が縄文文化なのですけれども、実は八

つぐらいの文化圏に分かれております。今でも、広い北海道ですから、道東と道南は気候風土も違いますし、東北、関東、関西、九州、これは今でもお国柄が違いますが、こうした違いは縄文時代からあったわけです。そのなかで、この津軽海峡を挟んだ道南と北東北の縄文遺跡群を世界遺産にということで取り組んでおります。ただ、北海道は道南の６資産だけですから、これを道東、道北につなげていく仕組みをつくっていかなければならないと考えています。

今、日本遺産というのが文科省でありまして、２０年のオリ・パラまで１００カ所を目指しています。また、国交省では地域遺産というのもあります。これらを連携して、世界遺産だけでなく、世界遺産から日本遺産、そして地域遺産に結びつけていく作業が必要だと思います。これは、地域だけに任せてエントリーしていっても連携にはなりませんので、やはり国と北海道の関係機関が連携して、市町村と一緒にやっていくという仕組みづくりが喫緊の課題だろうと思います。

最後になります。次をまためくっていただいて、文化遺産のネットワークづくりということですが、世界遺産、日本遺産、地域遺産、こういった遺産を結びつけて、地域が輝いていくようにしていく、そしてそのアイテムとなるのが、地域の自然であり、その自然に育まれた縄文からアイヌ文化という歴史、そして今に続く食文化や１次産業、この魅力を発信していき、そして連携していくということが大切だと思います。この魅力を発信していくところが、まさに情報発信基地である「道の駅」であり、この発信拠点の連携を導くのがシーニックバイウェイだろうと考えておりますので、こうした制度をさらに御支援頂きたいと思っておりますし、それによって北海道島全体が「世界水準の価値創造空間」になると信じています。

以上でございます。

○司会　ありがとうございました。

６．意見交換

○司会　進行の不手際によりまして、この後の意見交換の時間がほぼできなくなっておりますが、お一方だけ、これはぜひというところがございましたら承りますが。

大変失礼いたしました。大臣、よろしくお願いします。

○太田国土交通大臣　一つは、全体的にはコンパクトシティということ、「コンパクト・プラス・ネットワーク」ということをいうのですが、北海道という立場になりますと、「コンパクト・プラス・ネットワーク」というのがどういうふうに展開をされるということになりますでしょうか。その辺、ちょっとこちらの方がいいのか、よくわかりませんが、どなたでも結構です。

○司会　佐伯様、いかがですか。

○佐伯氏　恐らくいわゆる府県型と、東北から関東から関西、中国地方で考えるコンパクトシティと、北海道はどうも違う、距離があり過ぎるなと。その３０万人、４０万人の一

つの人口規模の中で、最適ないわゆる市民サービス、そこには一定の雇用もありながらというところだとは思うのです、イメージしているコンパクトシティというのはですね。でも、北海道のこの距離をどう埋めるのかというのは、ちょっと違う視点で取り組んでいかないと難しいのではないかと思いますけれども。

○太田国土交通大臣　私もちょっとそういう感じがして、コンパクトシティ・プラス・ネットワークという、全国的なそういうことよりも、さっき田中さんがおっしゃったように、距離感が全然違うから、そうすると、小さな拠点みたいなことを上手に使いながら連携をとっていくという感じですかね。どうなのですか。

○田中氏　そのとおりだと思います。

○坂本氏　先ほど田中さんがおっしゃったように、道東などでも、まだ６０キロとおっしゃいましたけれども、１００キロぐらいの距離を通院されているところというのは、道東、道北、たくさんあるのです。東北、青森など、今、コンパクトシティとかやられていますけれども、先ほど佐伯さんがおっしゃったように、北海道の場合はかなり広域で一つの役割を持っている地域というのがたくさんありますので、大臣がおっしゃったように、北海道は他の地域と違うかなと。私は本州のほうの仕事もやっていますけれども、本州とはまるっきりやはりそういう面では違います。

○太田国土交通大臣　それから、日常生活をしていると、価値の問題の、難しい空間ということを言って、さっき暮らしやすいということの価値を優先してつくっていこうとするのか、あるいは両方なのでしょうが、世界に発信するということでの価値というものを求めるのかという話もあったのですが、私はともに、当然両方だろうというふうに思いますが、そのときの、世の中がどういうふうに変わっているかという情報を北海道で、かなりこういう機会とかいろいろなことで情報をつかまえていくということが非常に大事だと思います。

折谷さんがおっしゃっていた、花があるでしょう、クルーズ船が来るでしょう。クルーズ船がものすごく増えているのです。そうすると、クルーズ船がついた瞬間に、まちが暗いと。函館は全然いいわけです。ところが、まちが暗いということになると、クルーズ船に乗っている人たちはがっくりするのです。花がきれいとか、大体夜がいいか昼がいいかという、まちによって夜と昼、両方というところはなかなかなくて、函館なんて両方ともいい、珍しいまちなのですけれども、その辺、そして来年の今ごろには、ついに新函館北斗まで新幹線が行く。関東以北の人たちはものすごい楽しみにしています。恐らく北海道の人が考えている以上にインパクトがあります。この間、埼玉県で私が２，０００人ぐらいの会合で話をしたら、どよめきが起きました。３時間４０分で大宮から函館に行きますと。そのとき、函館は来年が勝負だと思うのです。初めて行った人たちが、昼行った人もいいと。朝市もよかった、花もきれいだった、いか踊りというのは楽しかった、函館は夜景だけではなくて昼もいいぞと。そして花できれいだぞというインパクトは、来年、函館が大勢のインバウンドだけでなくて、日本の、特に東京から北の人たちがなだれ込んでき

たときに、すごいぞという希望を与えるということは、今後の北海道の展開にはものすごく大事なことになると思うので、ぜひとも折谷さん、頑張って頂きたいというふうに思います。ものすごい観光には見るもの、買い物、食べ物という、三つのものが必要で、見るものという中には、文化とか伝統とか歴史ということに海外の人はものすごく興味を持つのです。単に景色がきれいなだけではない。そこに文化、伝統、そこは函館とかそのあたりはものすごくありますね。そこにインパクトを与えて、来年、非常に勝負だと思います。それは今後の北海道の展開に非常に大事なので、我々、新函館北斗駅までの開通を成功させてというふうに思っていますので、よろしくお願いしたいと思います。

雪が、今回、道東に降って、ただ、そこでは酪農も、釧路をバルク港湾に指定して、ここで１４メートルの水深の岸壁をつくりますと、相当飼料が安くなって、３分の２ぐらいで入ってくるという、一つ一つの動きのチャンスというものをどうとらえるか。

留萌や石狩のあたりの、これから港ということでも、北極海航路が動き出しますから、苫小牧も含めて、どういうふうにそうした時代の大きな変化というものを受けとめて、北海道がその中のメインプレイヤーとしていくかということが非常に大事だなと私は思っています。

きょうは大変いいお話を聞かせていただいて。

○司会　大臣には、この後、コメントをまた頂きたいと思います。

○太田国土交通大臣　今のはまとめではなく、参加者としての意見です。

７．太田国土交通大臣コメント

○司会　再び御登場賜ります。皆様の御意見を踏まえまして、コメントをお願いします。ちょっと時間の関係上、３分程度でお願いできればと。

○太田国土交通大臣　これが第１回目、本当にありがとうございました。大変いろいろ、ずっと２時間、頭の体操、いろいろさせていただいて、無人の農機を使わなくちゃいけないなとか、お酒はそんなにおいしいのかとか、千葉県で、成田に行くところに道の駅を今つくっているのですが、その道の駅は、発酵食品の道の駅という、そういうテーマを掲げて、水戸の納豆、発酵食品で勝負するという道の駅、成田につながるところでやっているのですが、発酵食品道の駅という、こういう特色を出していって、勝負しようとしているのですが、ここは何から何までいっぱいあるという感じがきょうは大変しました。いろいろな意見を述べていただいて大変勉強になり、そしてしっかりこれを取り込んでやっていきたいと、このように思っております。ありがとうございました。

局長が来ていますから、拍手はまだで、これからどんなスケジュールで、これから回って同じことをやって、局長参加でやっていきますので。

○澤田局長　大臣からの突然の振りでございましたけれども、本当にきょうは広範多岐にわたって、大変貴重なお話を聞かせて頂きましてありがとうございました。

きょうは大臣にお運びいただいて、１回目、キックオフということでございますが、こ

の後も全道のいろいろなところでこういった形で地域のいろいろな御活動をされている方から御意見を伺いたいというふうに思っております。そのほかにも、それぞれ私ども開発局の中に開発建設部が道内１０ございますが、それぞれの開発建設部の部長が中心になりまして、それとは別に、またいろいろなヒアリングもさせて頂けと。そういったことで、これを４月から５月、年度明け当初の活動をさせていただいて、大臣から冒頭、来春を目指して新計画の策定というお話ございましたが、中間の案を夏ぐらいに一たん取りまとめて、その案につきましてまた御意見を聞くと、こういうことをこれから事務的には進めてまいりたいというふうなイメージを持っておりますので、今後とも引き続き皆様にはいろいろな機会に御意見を聞かせて頂けると大変ありがたいというふうに思っておりますので、ぜひよろしくお願いいたします。

○司会　ありがとうございました。

８．閉　　会

○司会　司会にとりましては、筋書きのないドラマで、このような形になって大変申しわけございません。

最後になりますが、本日の机上配付資料につきましては、お手元に置いて頂ければ、私どもの事務局のほうからお送りさせて頂きます。

以上をもちまして、北海道価値創造パートナーシップ会議ｉｎ札幌～新たな北海道総合開発計画に向けて～を閉会いたします。

本日は、御多忙のところ御参集たまわり、まことにありがとうございました。（拍手）